

# 種豚改良増殖管理技術試験

吉田繁樹<sup>\*1</sup>・相馬由和

## 要 約

現在、肥育豚の生産方式で主となっているものは、LW・Dの三元交雑によるものである。このなかでランドレース種はF1種豚の生産上重要であり、高い繁殖能力、発育能力、優良な資質が求められる。

優良なランドレース種豚を作出し、県内養豚農家に種豚の配布及び精液の譲渡を行うとともに配布先農家の成績情報を得ることにより広域的な改良増殖を図る。

平成13年度は40分婉で子豚397頭を生産した。33頭の育成豚を払い下げし、6頭分の精液を払い下げた。

キーワード：ランドレース、改良増殖

## 緒 言

我が国に最初にランドレース種が導入されたのは昭和35～36年である。まだ大型品種が普及していないなかで当時は飼養管理の難しさや繁殖障害が多く出るなどの理由で敬遠されることもあったが、品種への理解や高い産肉成績により、急激に増加し、飼養形態が中型種から大型種へ移行するさきがけとなった。その後、改良が進み日本に定着したランドレース種は三元交雫の基礎となる種雌豚として広く用いられるようになった。昭和50年代以降はデュロック種が止め雄として普及し、現在でもLW・Dの三元交雫が肉豚全体の8割近くを占めている。

三元交雫におけるランドレース種の役割はF1母豚生産であり、基礎となる部分である。そのため、高い繁殖能力、産子の発育能力、強健性を子豚に伝えなければならない。

高い能力のランドレース種を増殖させることは、経営の向上に間接的ではあるが幅広く影響を与えると考えられる。

当試験は外部から優良な種豚・精液を導入してさらに優れた種豚を作出し、それを県内農家に払下げることにより、広域的な改良効果を生み出すことを目的とする。

## 材料及び方法

基礎となる種豚は以前から当所で飼養していた種豚と平成11年度に外部より導入したランドレース種。

基本計画では、図1に示したとおり當時、種雌豚28頭、種雄豚6頭を飼養し、これら及び輸入精液を用いて繁殖を行った。

同一交配組合せ最初の産次で1腹当たり概ね雌雄各1頭の育成豚を選抜し、その中で優良なものを更新豚とした。また、次の産次で生産されたもののうち優秀な育成豚を農家への払下豚とした。その他、毎年、輸入精液の導入、外部より繁殖豚を導入した。

育成豚については、自家検定を実施して成績の検討をおこなった。育成豚の選抜にあたっては、検定成績及び体型や肢蹄の状況等を考慮して行った。

育成豚の払い下げは、7～8ヶ月齢でおこない、精液の払い下げは、通年実施した。

## 結 果

平成13年度は、40腹分婉し397頭の子豚を生産した。離乳子豚数は375頭で育成率は94.5%であった。また、子豚の生時および3週齢平均体重は、それぞれ $1.69 \pm 0.37\text{kg}$ と $6.94 \pm 1.54\text{kg}$ であった。

雄18頭については、産肉能力検定を直接検定で

\*1 現 茨城県県南地方総合事務所

行った。成績は、合格13頭、不合格5頭であった。

産肉能力成績のうち、飼料要求率は3.07、1日平均増体重は952.7 g、ロース断面積は平均32.1 cm<sup>2</sup>、背脂肪の厚さは平均1.71 cmであった。

飼料要求率および1日平均増体重は全国平均を上回る好成績であった。また、ロース断面積については全国平均と比較していまだ成績は劣るもののが当所における過去3年間の平均成績と比較して明らかな改善が見られた。背脂肪の厚さについては従来どおり好成績であった。

育成豚の払い下げは、県内の農家13戸に対し、雌32頭、雄1頭の計33頭おこなった。精液の払い下げは農家6戸に対し、6頭分おこなった。

#### 引用文献

- 1) 日本の養豚 編集部 (200) 本誌に見る養豚50年の歩み 日本の養豚2000年1月号
- 2) 社団法人 日本種豚登録協会 豚産肉検定全国成績 (H13年度)

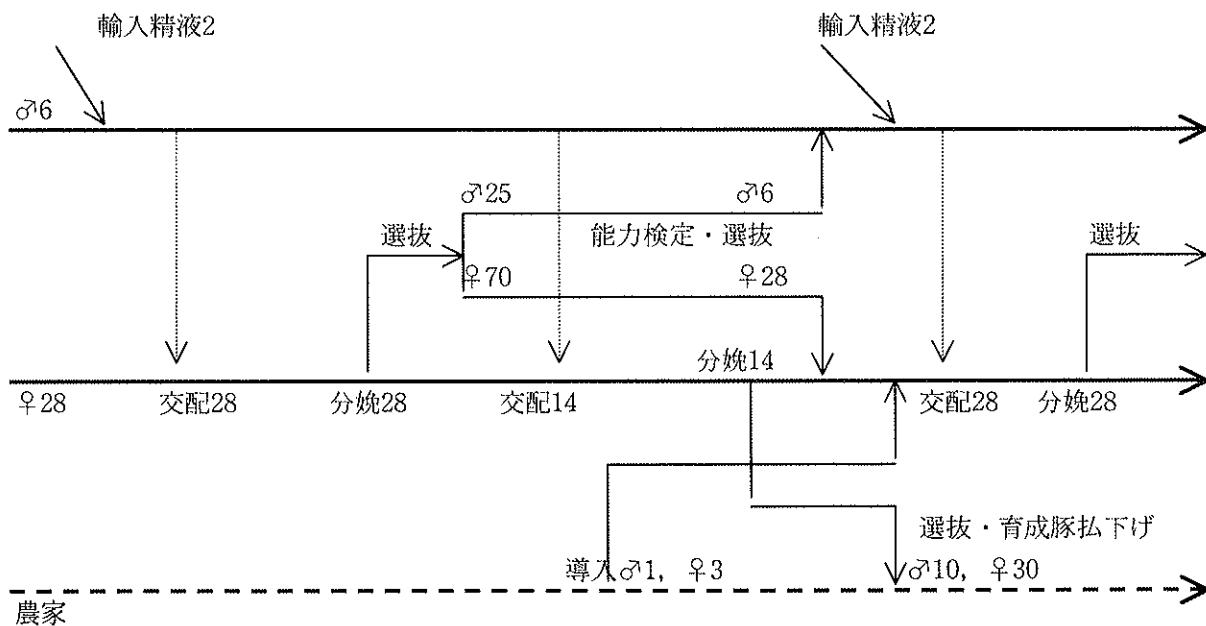


図1 基本計画

表1 繁殖成績

分娩腹数	生産子豚数	離乳子豚数	育成率	生産子豚 平均体重	3週齢 平均体重
腹	頭	頭	%	k g	k g
40	397	375	94.5	1.69±0.37	6.94±1.54

表2 産肉能力成績

項目	検定豚 (雄)
検定頭数 (検定終了豚)	18
飼料要求率	3.07±0.54
1日平均増体重 (g)	952.7±83.9
ロース断面積 (cm <sup>2</sup> )	32.1±5.5
背脂肪層の厚さ (cm)	1.71±0.31